とある仲良しの日常

Dom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある仲良しの日常

【Ｎコード】
Ｎ１３４６ＢＡ

【作者名】
Ｄｏｍ

【あらすじ】
――学園都市。そこに仲の良い５人がいた。
上条当麻。　一方通行。　食蜂操祈。　土御門元春。
周大和。

そんな５人のほのぼのとした日常を書いていこうと思います。
たまに戦闘。
たまにシリアス（？）

ですが、極力上記の2つは避けていこうと思います。
上条と御坂は出会ってない設定で。

ほのぼのオンリーでいこうと思います。
オリキャラは一人入れました。

初心者初投稿ですが、頑張っていくので
よろしくお願いします。

登場人物（前書き）

仲良し5人の日常を書いていこうと思います。
初心者ですので、不明瞭な点が出てくるかもしれません。
もし、そうなった場合アドバイスなどしていただけると助かります。

登場人物

登場人物

1．上条（かみじょう）　当麻（とうま）

とある高校に通っている高校1年生。右腕には【異能】の力なら大小問わず打ち消してしまう「幻想殺し（イマジンブレイカー）」を持っている。
幻想殺しは彼の中に秘められているもう1つの力を抑えるためにあって、他人の力を打ち消すのはついでのようなものである。
幻想殺しの力を解除している間のみ今まで打ち消してきた他人の力を自分のものとして扱うことができる。
解除したときのデメリットは異常なまでにお腹が減ってしまうことである。なので彼は極力その力を使わないため、体術を小さい頃から学んでいた。よって今ではスキルアウト10人に囲まれても幻想殺しと自分が極めた体術で敵を全員気絶させ、その場を突破することができるようになっている

2．周（しゅう）　大和（やまと）

オリキャラ。彼の能力は「座標補足（ポイントキャッチ）」レベル5の第6位。
座標を求めて、その座標に【何か】をするのが彼の能力。
何か…というのは曖昧だが補足した座標に攻撃をする場合「炎」を使ったり「電撃」を使ったりどんな方法でも攻撃することが可能である。
相手の攻撃を曲げることも可能である（体の動きは不可能）なので一方通行より強いが、上条には勝てない。
ただ、能力測定のときは彼の能力で一番使いやすい「空間移動」の能力で受けているため、
表向きではレベル4の空間移動（テレポーター）能力者になっている。
彼がレベル5と知っているのは統括理事会と上条達だけである

3．一方通行（アクセラレータ）

いいやつ。　めちゃくちゃいいやつ。
ベクトル操作を持つ学園都市最強の男。だが上条と周には勝てない。
上条の手を借りて、一人も妹達を殺さずに実験を中止に追いやった。

4．食蜂　操祈（しょくほうみさき）

一度、能力が暴走していたときに上条に助けられた。
結果、惚れてしまった。
いつもいつも上条にひっついている。上条の周りの奴らは呆れ気味
でその風景を見ている。
むやみに能力を使わないいい子…のはず。

5．土御門　元春（つちみかどもとはる）

魔術師。レベル０の「肉体再生」を持つ男。
いつも上条達に振り回されている。
彼らのいつメンのうちの一人

登場人物（後書き）

自作から始めます！
舞台は学園都市

夏休みも終わりに近づいた5人の日常です！

8月25日（前書き）

ついに始まります！

よろしくお願いします

8月25日

――――8月25日

――学園都市とある病院の一室

そこには白髪で赤色の瞳をもつ少年が親友が訪れてくるのを待っていた…

コンコン

??「一方通行(アクセラレータ)…入ってもいいか?」

一方通行「あァ…構わねェ」

??「元気してたかよ親友」

声のした方にはワックスで固めたであろうツンツン頭が特徴的な少年が立っていた。

一方通行「体はお前のせいで傷だらけだが、精神的には問題ねェ…アリガトな当麻」

上条「いいってあんな実験潰したほうがいいに決まってる」

あんな実験とは、一方通行が妹達と呼ばれるクローンを2万回殺すことで絶対能力者(レベル6)に成れる…という内容の実験である。

一方通行「まァ…潰すために結構痛い思いしたが、それであいつらが死なねェんだったら問題ねェよ」

上条「あの時は手加減したらいけないと思ってさ……ん?」

廊下を全力で走っているであろう音が聞こえて、上条と一方通行は話を止めた。
ドアが乱暴に開けられ、病室に陽気な声が聞こえてきた。

??「上や〜ん!元気してたぜよ〜?」

??「おいおい土御門…それは一方通行に言う言葉じゃねーのか?」

土御門「いやーついついクセで上やんに言ってしまったぜよ」

上条「土御門に大和!お前らもお見舞いか?」

病室に入ってきたのは土御門元春(つちみかどもとはる)と、周大和(しゅうやまと)の二人であった。

大和「ま、そんなとこかな?」

土御門「まさかほんとに実験を中止に持っていくとはにゃー…ほんとに上やんはすごいぜよ」

大和「そのせいで一方通行はボロボロだけどな」ニヤニヤ

一方通行「てめェ…何笑ってやがる!」

大和「おいおい…ここは病院だぜ?暴れんなよ一方通行」

一方通行「暴れる気はねェよ」

上条「それよりさ、いつ退院するんだ？」

一方通行「あと2日ぐらいかァ？カエル顔はそう言ってた気がするがなァ」

そこへ冥土返し（ヘブンキャンセラー）と呼ばれる医者が入ってくる

冥土「だれがカエルだって？」

大和「先生！」

冥土「彼、明日には退院できそうだね」

上条「お！退院したらみんなでパーっと飯でも食いにいくか！」

土大一「「「いいね（ェ）賛成だ（にゃー）」」」

そうこうしている間に完全下校時間が近づいてきた。

上条「んじゃぁ俺たちは帰るな～」

一方通行「あァまたな」

大和「バイビ～一方通行」

土御門「しっかり寝るぜよ～？」

一方通行「ふン…うるせェ」

上条「予定はメールで教えるからな～」

一方通行「ほんとに当麻には世話になりっぱなしだよなァ」

冥土「彼はほんとに面白いことを考えるね」

冥土「君を全力で叩き潰すことによって【上】に「一方通行は実はレベル0にも負けるほど弱いんだ」って思わせる。それで実験を止める…ね」

一方通行「まァ、いつ戦ってもあいつには勝てねェからな」

少しの間病室は静かになった。
突然冥土返しはこんなことを言い始めた。

冥土「いくらクローンと言っても彼女たちは「人間」だからね？だから死んでいいなんて思ってはいけないんだよ」

一方通行「一人も殺す気はねェし、一人も死んでねェ…それもあいつが頑張ったからだろうなァ」

冥土「もし…もしもだよ？再び妹達がつくられ始めたら…君はどうするつもりだい？」

一方通行「答えはひとつだァ…研究所を塵も残さず消す。ンでもって妹達を保護してこの病院に連れ帰る。」

冥土「二つ答えを言ってるような気がするんだけどね」

そう言って冥土返しは病室から出るためドアに手をかける

冥土「それとね一方通行」

一方通行「なんだ？」

冥土「病院はホテルじゃないからね？」

そう言い残して冥土返しは病室から出ていった。
彼が病室から出た直後一方通行は眠りについた……

―帰り道

土御門「予想以上に元気でなによりぜよ」

上条「だな～」

大和「その通りだ…ぜ…？」

土御門「どうしたんだにゃー？」

大和「直感だけどよ…そこを右に曲がったら操祈が居そうなんだけど」

土御門「ははは、そんなわｋ「当麻さん！」…あったぜよ」

声がした方向から、常盤台中学の制服を身に付けた美少女が3人の元へ走ってくる

上条「おう！今日も元気だな操祈！」

食蜂「当麻さんこそ元気で何よりです」

食蜂（しょくほう）操祈（みさき）…彼女は以前能力が暴走して人への読心術がフルでオープンになってしまい、ずっと他人の心の声が聞こえ続けて苦しんでいたところを上条の幻想殺しによって助けられている。
それ以来上条に惚れてしまい、ずっと一緒にいるのである。
ちなみに、惚れた時から毎日のように、上条に告白しているが毎回彼に振られている。
それでも諦めることなくずっと一緒にいるのである。

大和「操祈は一方通行の見舞い行ってあげたか？」

食蜂「え…一方通行さん入院してたんですか！？」

彼らは一方通行の入院した理由を全て話した。

食蜂「そうだったんですか…」

大和「ま、こいつが一方通行をブン殴って実験を終わらせたんだけどな」

土御門「上やんのパンチは痛いぜよ…一方通行よく耐えれたにゃー…」

上条「それで、明日一方通行が退院するからどこかでパーっと祝ってやろうかな～なんて考えてんだけど…操祈はどうする？」

食蜂「行きます！みんなで祝ってあげましょう！もちろん私の席は当麻さんの隣ですよ！異論は認めません！」キラキラ

土御門「目が輝いてるぜよ…」

上条「んじゃ、後で皆にメールで予定を教えるな～」

食土大「「「了解！！」」」

上条「それじゃ、また後でな」

４人が自分の住んでいる寮へ帰っていく。
食蜂だけ寮が違うのだが…

食蜂「なぜだァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」グォォォ家

上条当麻は悩んでいた。

上条「明日退院だろ？だったら明後日のほうがいいんじゃないか？いや…でも明日でもいいしなぁ…」

┃１０分後┃

上条「明後日でいいだろ…」ハァ

Ｔｏ土御門
Ｔｏ大和
Ｔｏ操祈
Ｔｏ一方通行

本文

よう
退院祝いのことなんだけど
明後日にしようと思う。
１８時３０分に俺たちの寮の前で
集合でいいか？
それと、ミサキチは寮の門限とか

大丈夫なのか？

──────────

──1分後──

Ｐｉｒｒｒｒ

上条「いや、早すぎだろ」パカッ

──────────

Ｆｒｏｍ操祈

門限は大丈夫です！

それと、当麻さんが決めたことに

反論するつもりはありません！

Ｐ．Ｓ必ず私の隣に座って下さいね？

──────────

上条「いやいやどんだけ必死なんだよ…可愛い奴め」ニヤニヤ

その後、土御門、一方通行、大和の順番でメールが届いた。
彼らも上条が立てた案に反対は無いそうだ。
そして、もっと詳しく予定を立てたあと全員にメールで内容をもう1度送った。

上条「うっし！風呂に入って、寝るとすっかね」

8月25日（後書き）

完璧なほのぼの空間をつくるのって苦労しますね。

8月26日（前書き）

前回、登場キャラクターは一通り全員出しました。
これ以上増えたら書くのが難しくなりますかね？
今日は周をメインにやっていきます

8月26日

――――――8月26日

周大和は11時まで寝てしまっていた。

大和「ん…？11時か…寝すぎたな」

身支度を済ませると昼食を食べに外へ出かける準備をしていた。
ちなみに一方通行が退院するのは夕方。
上条は補修。
土御門は…義妹と遊んでると思う。
ミサキチは…別にいいや

大和「一人かよ…」

ぶつぶつ独り言を言いながら寮を出て、レストランへ向かった…

大和「おいおい…ありゃリンチってやつか？しょーがねぇ助けてやっか」

路地裏を見る彼の視線の先には１０人ぐらいの不良達に囲まれてピンク色の髪の毛でツインテールの常盤台の女の子がビルの壁に押し付けられている瞬間が映っていた。

大和「うっし！いっちょやりますか！」シュンッ

不良Ａ「うわッ！なんだこいつ！？」

不良Ｂ「テレポーターか…？」

大和「はいはい、そこまでそこまで。その子を放してやりな」

不良Ｃ「うっせーなぁ…部外者はだまってろ」

大和「日本語がわかんねーのか？話せって言ってんだよ！」

不良Ｂ「あぁ！？誰に向かって口聞いてやがる！てめぇらやっちまえ！」

―1分後―

不良達「「「「「「「「「「すいませんでしたッ！」」」」」」」」」」」」ボロボロ

大和「……さっさと失せろ」

??「助けてくださってありがとうございますの。何かお礼をしたいのですが…」

大和「いいって！困ってたらお互い様って言うだろ？」

??「少しでも恩をかえさせてくださいまし！」

大和「うーん…そこまで言うならお願いしようかな！ところで君の名前は？」

??「わたくしの名前は白井黒子と申しますの」

大和「んじゃ黒子…昼飯奢ってくんない？」

黒子「（んなぁ！？この殿方…いきなり名前で呼んでくるんですの！？）」アセアセ

大和「おーい…黒子さーん？」

黒子「ゴホン…で、ではお昼ご飯でよろしいのですね？」

大和「できればね…無理ならクレープとかで済ますけど…」

黒子「結局食べ物なんですのね…こちらもお話したいことがあるのでお昼ご飯を一緒に食べに行きましょう。」

大和は、白井黒子と名乗る常盤台の学生と共に昼食を食べることとなった。
まさかこの後自分に弟子入りしたいと名乗ってくる人がいることなど予想もしていなかった。

レストランについた二人は改めて自己紹介をしていた。

黒子「やはり周さんは空間移動能力者でしたのね」

大和「あぁぁ……そうだよ。あと、俺のことは大和でいい。」

黒子「了解ですの。」

大和「それとさ黒子ちゃん…なんでさっきは能力を使ってなかったの？」

黒子「あの不良たちに囲まれてた学生を逃がして、彼らを捕まえようとしたんですの。そしたら不意を突かれて頭を攻撃されまして…」

大和「その衝撃で空間移動が出来なくなった…と…？」

黒子「恥ずかしながら…そうですの」

大和「空間移動は精密な計算が必要だからな～…頭攻撃されちゃ使えなくなるのもおかしくないしね」

黒子「わたくしの不注意で大和さんまで巻き込んでしまって…申し訳ないですの」

二人の間に謎の沈黙が現れる…
先に口を開いたのは白井の方だった。

黒子「失礼ですが、大和さんは能力の限界値はいくらですの？」

大和「えーっとね…（やっべーよ限界値？覚えてーよんなもん…テキトーに答えるか）」

彼は空間移動の能力検査を受けているが、空間移動が自分の能力でないため限界値など覚えていないのだ

大和「たしか…距離は１ｋｍで、最大で５ｔぐらいなら飛ばせるな（あれ？これじゃあ霧ケ丘の座標移動よりすごくね？）」

黒子「す…凄すぎですの。わたくしなんか８０ｍしか飛ばせない上、１３０ｋｇが限界ですのに…」

大和「そ…そう落ち込むなって！」アセアセ

黒子「申し訳ありませんの…」

そうこう言ってる間に頼んだ品が届いた。

大和「いっただっきまーーーーっす！」

黒子「いただきますの～」

無事、昼食も食べ終わり二人は外へ出ていた。
そこで白井黒子はとあるお願いを周にするのであった。

黒子「や…大和さん！わたくしを弟子にしていただけないでしょうか！？」

大和「いきなりどうしたの！？」

黒子「いえ…大和さんに教えて頂いたらもっと強くなれると思いま

して…」

大和「……強くなりたい理由を教えてくれないか？」

黒子「わたくし、風紀委員に所属していますの。そこにいる私の相棒は情報処理においては右に出るものは居ないほどすごいのですが、戦闘能力では小学生にも負けてしまうほど弱いんですの。」

大和「で…その子を守るために強くなりたいと？」

黒子「えぇ…その子を…初春を…守りたいんですの！」

大和「守りたい…ね…いいぜ！弟子ってのにしてあげよう」ニカッ

黒子「あ…ありがとうございますの！」

そして二人は携帯番号とメールアドレスを交換した。
白井黒子は風紀委員の仕事が入ったとかで、急いで支部へ向かっていった。

そして周大和に弟子が出来た。

大和「つか何教えればいいわけ！？」アセアセ

大和「一方通行に模擬戦でもやらせるか」ニヤニヤ

大和「アイツ相手じゃ攻撃当たらねーしなぁ…上条が最適かな？」

いろいろなことを考えながら歩いていく周。
そんな彼の目にある風景が飛び込んできた。

大和「今日の俺は不幸なのかな？」

大和「銀行のシャッターが降りている…。」

つまり銀行強盗でも起きたのであろう。
彼はすぐに行動を始めた。

大和「つってもどーっすかなー…とりあえず裏口でも探してそこから入るか…？」

だが、彼はそこで考えを変えた。

大和「俺が裏に回ってる間に中の人が怪我したらどうするんだ…シャッター壊すか…」

空間移動して建物の中に入る案もあったが、飛んだところに人がいたら大変なことになるのでシャッターを壊すことにしたのである。

大和「計算終了……溶けろッ！」

大和の手から灼熱の炎が生み出される
炎はシャッターを溶かし、穴を作る

強盗Ａ「な、誰だてめぇ！」

強盗は2人。片方が体から電撃を出しているので片方は発電能力者であることがわかる。

強盗B「感電したくなかったらそこを動くな！」

大和「動くなって言われると動きたくなるんだよね～」ニヤニヤ

大和が強盗に近づこうとした瞬間電撃が飛んできた。

大和「じゃましないでくれない？」

大和が右腕を振ると電撃が大和の右後ろへ方向転換し、飛んでいった。

強盗B「な…曲げただと！？俺はレベル3だぞ！？何をした！！」

大和「何をしたって言われると……曲げました」キッパリ

強盗A「ふざけやがって…燃えて消えろ！！」

強盗の手のひらから炎の塊が飛んでくる

大和「だ～か～ら～当たらないって…」

大和が右腕を炎に向けると、炎はまるで動きが止まったかのように空中で静止した。

強盗Ａ「何！？何をしたぁ！！」

大和「お前ら二人の計算式を逆算して、攻撃対象の座標を俺の任意の場所に移動させてもらっただけですぜ」

強盗Ｂ「は…はぁ！？そんなこと出来るわけねーだろ！」

大和「うっせーなー…もうそろそろ風紀委員が来る。それまで寝ててもらうぜ！」ダッ

大和は強盗２人にパンチを浴びさせ気絶させた。

大和「上条直伝のパンチだ…３０分ぐらいで目は覚めるとおもうぜ？」

大和はすぐさま強盗２人を拘束して、風紀委員の到着を待っていた。そんな彼に先ほど弟子入りした少女の声が届く。

黒子「師匠！こんなところで何をなさってるんですの？」

大和「ん？黒子か…そっか、ここはお前の支部の管轄なんだな」

黒子「はい…もしかしてあの２人が強盗ですの？」

大和は強盗事件で起きたこと全てを話した…。

黒子「はぁ…そうでしたの…」

大和「まぁそんなとこかな？俺、用事あるから帰っていいか？」

黒子「えぇ…構いませんの。あと、今度時間が出来たら風紀委員１７７支部に来ていただけませんか？」

大和「別にいいけど…俺捕まるようなことしたっけ？」

黒子「いえ、わたくしに師匠が出来たと仲間に伝えると是非１度でいいから見てみたいと言っていますの…」

大和「そんなことか～…別にいいけど、2学期始まってからでいいか？」

黒子「構いませんの！ではよろしくお願いしますわ」

白井は2学期に特訓を受けさせて欲しいと大和に頼むと銀行の中へ入っていった。
大和はそれを見届けるとある場所へ向かっていった。

コンコン
大和「はいるぞー」ガラガラ

一方通行「どうしたァ…こんな昼間っから暇なのかァ？」

大和「さっきまで壮大なスケジュールだったんだぜ？」

一方通行「何かあったのかァ？」

大和「いやぁ…銀行強盗を懲らしめてきた！」

一方通行「お前に当麻の不幸が移ったんじゃねェの？」

大和「それはそれは…困りましたな」

彼らが話初めて二時間が経過したころ冥土返しが部屋に入ってきた。

冥土「もうそろそろ出ていっても大丈夫だね」

大和「うっし！じゃあ荷物運んでやるよ」

一方通行「ン」

二人は荷物を抱え部屋から出ていった。

大和「荷物少なくね？」

一方通行「もう寮に送ったからなァ…」

大和「そっか！準備がいいなお前は…」

日も暮れかかっている学園都市の道を二人のレベル５が歩いていく。

大和「明日、楽しみだな！」

一方通行「あァ」

8月26日（後書き）

8月27日（前書き）

前回はちょっとだけバトルがおきましたが、無事終えることができました。

8月27日

――――――8月27日

上条たちが住んでいる寮の玄関先に男が4人立っていた。

大和「今日は皆に合わせたい奴がいるんだ…」

上条「合わせたい人？」

大和「あぁ…昨日路地裏で助けた子なんだけど、その子空間移動能力者だったのさ」

一方通行「へェ……ンでお前の能力見て、弟子にしてくださいとか言ってきたオチか？」

大和「大正解！さすが第一位の頭脳だ」

土御門「弟子…？弟子…？弟子…？にゃ…にゃー」

上条「土御門が壊れた！」

４人が遊んでいる時、弟子は現れた。

黒子「初めまして。常盤台の白井黒子と申しますの。よろしくお願いしますの」

大和「えーっと左かｒ「んじゃまず俺から！」…よろしく」

上条「俺は上条当麻！能力は…能力は……無いってことにしておいてくれ」

土御門「俺は土御門元春。土御門って呼んでくれにゃーちなみに天下のレベル０ですたい」

一方通行「一方通行。能力はベクトル操作。序列は第１位だ」

黒子「第1位様ですの！？」ビックリ

一方通行「序列で呼ぶンじゃねェぞ？」

黒子「わかりましたの。」

自己紹介も無事終わり、あとは彼女を待つだけになった。
そこへ1通のメールが届く

―――――――――――――――――――――

Ｆｒｏｍ操祈

本文
当麻さん！申し訳ありません。
少し遅れそうなので先にお店に
行っておいて下さい。

Ｐ．Ｓ隣の席は必ず開けておいて
くださいね！

―――――――――――――――――――――

黒子「この方は…ご彼女か誰かですの？」

上条「いや、そんなんじゃないんだ」

一方通行「早く行くぞォ」

レストランについた一同は席についた。
今回は中華風レストランなので机は円の形になっている。

上条「俺の右側は開けておいてくれ。後でめんどくさいことになるから」

大和「だな」ニヤニヤ

土御門「その通りですたい」ニヤニヤ

一方通行「眠みィ」

黒子「了解ですの」

料理を頼んで、しばらくすると操祈がレストランに駆け込んできた。

食蜂「当麻さん！皆さん！遅れてすいません！…ん？常盤台の制服？」

上条「まだ飯は来てないから問題ないぜー」

黒子「な…な…なぜ心理掌握（メンタルアウト）様がここに！？」

食蜂「あら…私はここに来てはいけないのかしら？」

黒子「い…いえ…決してそのようなことは…」

食蜂「そんなに怯えないでちょうだい」クスクス

大和「そっか操祈は常盤台の２大エースだもんな」

食蜂「えーっとあなたの名前は…」チラッ

土御門「なんだにゃー？」

食蜂「白井黒子さんね？私は食蜂操祈。操祈でいいわ」

黒子「は…はい！よろしくお願いしますの」

握手をする2人。その傍らで白髪の男と茶髪の男が静かに話していた。

大和「今、土御門覗かれたな」ヒソヒソ

一方通行「あァ…確実だなァ…」ヒソヒソ

上条「こら！操祈！勝手に人の頭覗いちゃダメだろ！」プンプン

食蜂「あ…ご…ごめんなさい！嫌いにならないで！」

上条「今回は土御門だから別にいいけどほかの人だったら許さない

からな！」

食蜂「ごめんなさい…」ウルウル

大和「聞いたかよ！土御門だから別にいいってよ」ヒソヒソ

一方通行「アッヒャッヒャッヒャッヒャ」ヒソヒソ

大一「「……！……！」」

笑いすぎて声が出ない2人。
その隣の席で黒子に慰められているアロハグラサン。

そうこうしている間に頼んでいた品が届いてきた。

上条「それでは！一方通行の退院を祝ってぇぇぇぇぇぇぇ……乾杯！！！」

一同「「「「「「「乾杯！！」」」」」」」

――――――中華料理店内

上条「ここの料理美味しい！」モグモグ

土御門「中華なんて久しぶりだにゃー」モグモグ

大和「この餃子上手い！」ギュオンギュオン

食蜂「いやいや、大和さん食べる音おかしくないですか？」パクパク

大和「ガン〇ムだ！」モグモグ

一方通行「最後の１個は俺がもら「させないぜよ！」おィ！」

黒子「（本当に仲が良いのですね）」パクパク

上条一行は夕食を食べ終え外に出ていた。
上条の腕に食蜂が抱きついているのはいつものことである。

上条「んじゃーここらへんでお開きとしますか！」

大和「そうだな…じゃあ皆また今度な～」ノシ

食蜂「当麻さん！また呼んでくださいね！」ノシ

６人は男女に別れて自分たちの寮へ向かって歩きだしていく。
白井黒子は思い切って食蜂にこんなことを聞いてみた。

黒子「操祈さんは上条さんのことを異常なまでに慕っているようですが、過去に何かあったんですの？」

食蜂「えぇ…過去に1度能力が暴走してね、その時に当麻さんが助けてくださったの」

黒子「暴走しているレベル5を止めた??」ビックリ

食蜂「あら?当麻さんの力を知らないの?」

黒子「力…?（そういえば自己紹介のとき能力を言おうとした時躊躇っていたようなきがしますの）」

上条『能力は…能力は……無いってことにしておいてくれ』

黒子「（あの反応は一体…）」

食蜂「知らないんだったらいいの!」アセアセ

黒子「は…はぁ…」

気がつくと白井の寮の目の前に着いていた

白井は食蜂に頭を下げると、寮の中へ入っていった。

食蜂「（他人に力を教えると怒られますからね…）」

食蜂「（私でも当麻さんの全力を知りませんし、あの力は一体…）」

そうこうしている間に自分の寮へ着いていた。

食蜂「ただいま戻ってまいりましたわ」ガチャ

常盤台生徒「「「女王！おかえりなさいませ」」」

彼女たちと別れたあと、４人はこんな話をしていた。

大和「つーかさ、もうそろそろ夏休みも終わりだぜ？宿題やったか！？」

上条「明日で全部終わるぜ！ちゃんとやっててよかったぁ～」

土御門「何ぃ！？上やん宿題やってたのかにゃー！？」

上条「見たいんだったら帰りに俺の部屋に来いよな」

土御門「残念ですたい。もう終わってるんだにゃー！！」

一方通行「宿題だァ？そンな物もらってねェっつーの」シレッ

大和「うわぁ…セコイ…1位だからか！？俺だってレベル5だっつーの！」

一方通行「てめェが能力偽装してっからそォなるンだろォが」

大和「その通りでございます」ｏｒｚ

夏休み終了間際によく話される宿題の進度の話をしていると、彼らは自分たちの寮に着いた。
そして、おやすみの挨拶をすると各自別々の部屋に帰っていった。

――――――2時間後…とある路地裏の出来事

??「でもさー結局水着って人に見せつけるのが目的な訳だから、誰もいないプライベートプールじゃ高いやつ買った意味がないっていうか…」

??「でも市民プールや海水浴場は混んでて泳ぐスペースが超ありませんが」

??「んーたしかにそれもあるのよねー…■■はどう思う？」

??「浮いて漂うスペースがあればどっちでもいいよ？」

??「はーいお仕事中にたべらない。新しい以来が来たわよ」

??「不明瞭な依頼だけど、ギョラは悪くないしやることは単純かな」

??「やることって？」

??「1週間以内に来るであろう侵略者からの施設防衛戦！」

8月30日（前書き）

あの3人が登場です！

8月30日

――――――午後４時

とある病院の前に上条当麻、食蜂操祈、一方通行、土御門元春、周大和の５人はいた。

上条「ほんとにいいのかよ一方通行…彼女たちにこいつらを合わせて」

一方通行「構わねェ…アイツらも会いたいって言ってたしなァ」

大和「確か…第3位のクローンだっけ？」

土御門「でもどうしていきなり会いたいって言ってきたんだにゃー？」

食蜂「おそらくですが、友達が…欲しいとかではないでしょうか？」

一方通行「精神操作系最強の操祈が言ってんだ…間違いはねェだろ」

大和「黒子が来れなくてほんとによかったぜ…」

食蜂「黒子は御坂さんのことを異常なまでに慕ってますからね」クスクス

一方通行「お前が言うなよォ…」ハァ

食蜂「なあ…あ、あの子は相手が女の子ですが…私はッ！」アセアセ

土御門「レズっ子もいける！ってやつがうちのクラスにいるぜよ」

大和「青ピか…あいつは意味がわかんねーしな」

そんな話をしていると彼女たちがいる病室にたどり着いた。

上条「おーいみんなで遊びに来たぞー」

＜入っても大丈夫ですとミサカは即答します

一方通行「入るぞ」ガラガラ

一同「「「「「失礼しまーす」」」」」

上条「おう！久しぶりだな…元気にしてたか？」

００００１「体の傷は癒えましたとミサカは現状報告します」

一方通行「そりゃよかったなァ」

００００２「そこで貴方がたに少し相談があるのですとミサカはあなたの顔をまっすぐに見つめながら心中を吐露します。」

上条「俺たちに？」

００００１「はい。それとお話をするために少し外に出ましょうとミサカは貴方がたの腕を引っ張ります」

００００１号に引っ張られ部屋の外に出ていく上条と一方通行。
そのころ部屋では…

土御門「いやーほんっとそっくりだにゃー」

大和「俺はオリジナルを見たことねーからわかんねーけどな」

食蜂「いや、本当にそっくりですよ？」

大和「ん？当麻達いねーじゃねーか…どこいったんだ？」

００００２「それなら問題ありませんとミサカは横槍をいれます」

００００３「いま００００１号が彼らにお願いをしている最中ですとミサカは簡潔に答えます」

土御門「何で００００１号ちゃんがお願いしてるってわかるんだにゃー？」

００００２「ミサカ達は発電能力を使って脳波をリンクさせることが出来るのですとミサカはあなたにヒントを出します」

食蜂「それでネットワークでも作ってるの？」

００００３「はい、その通りですとミサカは答えを述べます」

大和「ほぉ…そりゃ便利だな」

土御門「今度かみやんと繋いで、テストをカンニングさせてみたいぜよ」

００００２「それは出来ませんとミサカは即答します」

土御門「冗談だにゃー」

００００３「！！…００００１号の相談が終わったようですとミサカは皆さんにお伝えします」

００００３号がしゃべり終わったと同時に上条と一方通行が部屋に入ってきた。
その後ろで００００１号がとても幸せそうな顔をしていた。

一方通行「俺は店の方をどうにかしてくる。あとは頼んだぞ」

そう言い残して一方通行は部屋から再び出ていった。
その行動に疑問を持った彼らが質問してきた。

大和「店ってどーゆーことだ？」

土御門「俺も気になるにゃー」

上条は００００１号と話したこと全て話した

食蜂「つまり、外を見てみたいと…」

土御門「まぁ生まれた時からずっと施設の中にいたらそう思うのが普通だにゃー」

大和「でもよ、３人も超電磁砲がいたら店員びっくりするぜ？」

上条「大丈夫だ、店出るとき操祈に店員全員の頭の中から妹達の記憶を消してもらうから」

大和「さすがレベル５…」

食蜂「いくらで借りる気なんでしょう？私たちも少しは出したほうがよさそうではありませんか？」

土御門「1位だから問題ないにゃー」

大和「でも移動はどうするんだよ？タクシー借りる訳にはいかねーしな…」

上条「え？俺と、大和。二人で飛ばせばいいじゃねーか」

大和「一番聞きたくない答えだぜ…」

Ｐｉｒｒｒｒｒ

Ｆｒｏｍ一方通行

本文

店ごと借りることに成功した。
座標を転送するからすぐに飛んで来い
その場所には何も物は置いてないから
安心しやがれ

――――――――――――――――――――

大和「んじゃ上条はミサカ達を頼む」シュンッ

上条「それじゃ行くぞ？」

００００１，２，３「「「よろしくお願いしますとミサカは…」」」

シュンッ

――――――オリャ・ポドリーダ店内

大和「とーちゃく！」シュンッ

土御門「スペイン料理のお店らしいぜよ」

食蜂「なんで当麻さんと一緒に飛ばしてくれなかったんですか！」
ウルウル

上条「操祈…泣くなって、俺の隣座っていいから…」ハァ

食蜂「ありがとうございます♪」ニコッ

００００１，２，３「「「これがレストランですかとミサカは感動します」」」

大和「驚きのシンクロ率だなぁ…」

一方通行「おィてめェらこっちだ」

一方通行が呼んでいる方へ7人は向かった。
そこには１０人ぐらいが入ることのできる大きめの部屋があった

一方通行「料理はもう頼んであるから待っとけば届くぜェ」

上条「さすが一方通行！対応が早いな」

大和「やっぱりスペインに関係する料理が出るのか？」

土御門「スペイン料理を出さなかったら、スペイン料理店を名乗る資格なしぜよ」

上条「でも一方通行が第7学区の店を選んでくれて助かったな」

大和「たしかにな…お嬢2人の寮や俺たちの寮、カエル病院があるからな」

土御門「遠くまで飛ばなくていいからテレポ屋さんにも最適だにゃー」

上大「「俺たちはテレポーターじゃねーよ！！」」

食蜂「皆様！お食事が来ましたよ」

一同「「「「「「「「「美味そうだな（（ァ）とミサカは…）」」」」」」」」」

土御門「それでは！皆さん！いただk「いっただっきまーーーす！」…にゃーー……」

一方通行「まァ…ドンマイだ」モグモグ

土御門「」

上条「どうだ？初めて食べるレストランの料理は」モグモグ

００００１「すごくおいしいです！」パクパク

食蜂「それはよかったわね」パクパク

大和「すぺ…スペイン料理ってのも美味しいな」ギュオンギュオンギュオン

００００３「周さん？食べる音が…」パクパク

食蜂「気にしちゃダメよ？彼はあれがデフォなんだからね」パクパク

大和「デフォじゃねーよ！」モグモグ

上条「ま、ミサカ達も喜んでくれて何よりってとこだな」

大和「他にやりたいこととかないか？」

食蜂「レベル５が３人いるのよぉ？なんでもできるわ」

００００２「あの…ではひとつだけッ！」

上条「ん？なんだ？？」

００００３「お…お姉様に会いたいですとミサカは…」

一方通行「オリジナルにかァ？」

００００１「はい…無理でしょうかとミサカは首をかしげます」

上条「でもこの中で御坂美琴に面識あんのは操祈だけだろ？」

大和「あとうちの弟子だけだな」

一方通行「てめェンとこの弟子は論外だコイツら見ただけでぶっ倒れちまう」

食蜂「私もちょっと無理ですね…寮が違いますし…」

００００２「ならいいんです！無理を言って申し訳ありませんとミサカは謝罪します」

大和「いや、俺ならいけるな」

上条「お前が！？面識ないのにか！？」

大和「こんど風紀委員の１７７支部に顔ださねーといけねーんだ…その時に超電磁砲にも来てもらっとけば、きっかけはつかめるかもしれねぇ」

一方通行「それしかねェな…頼んだぞ」

大和「任せろって！」

００００１「なぜ彼らは初対面のミサカ達のためにあそこまでしてくれるのでしょうかとミサカは戸惑いをあらわにします」

食蜂「それはね、貴方たちをひとりの人間として見ているからよ…あの人たちがどうやって実験を止めたかなんて知ってるんでしょ？」

００００３「はい。カエル先生に全てを教えていただきましたとミサカは答えます」

００００２「それでもミサカたちはボタンひとつで簡単に製造できる物であって…」

食蜂「それでも貴方たちは生きているじゃない…それだけで立派な人間よ」

００００１「ミサカたちは人間として生きてもいいのでしょうか…？」

００００３「お姉様にご迷惑をおかけしてしまうのでは…？」

食蜂「そこは大和さんがどうにかしてくれるわ…あの人たちを信じましょう」

食蜂達が話している時、上条は一方通行に呼ばれて店の外へ出ていた。

上条「いったいどうしたってんだよ？」

一方通行「黙ってきけよ？…妹達が１体だけだが再び製造されているらしいンだ」

上条「！？」

一方通行「ンで、俺はァ明日までに研究所の場所を掴んでおく。だから明日は予定を開けておいてくれェ」

上条「わかった…でも特攻は夜なんだろ？」

一方通行「あァ…すまないな当麻」

上条「いいって！別に気にすんなよ困ってたらお互い様だろ？」

一方通行「フッ…ありがとなァ」

そうして二人は店の中へ入っていった。

大和「食った食ったー」ゲフゥ

土御門「きたないにゃー」

上条「んじゃ…今日はお開きだな！」

一同「「「「「「「「「ごちそうさまでしたーーー！！！」」」」」」」」」

上条「操祈…この店にいる店員の全員の頭の中から妹達の記憶を消しておいてくれ」ヒソヒソ

食蜂「わかりました☆」キュピーン

上条「ありがとな」ナデナデ

食蜂「にゃッ！？／／／」

大和「じゃあこの子達は俺が送っていくな！」

上条「悪いな…よろしく頼む」

００００１，２，３「「「よろしくお願いしますとミサカは…」」」

大和「シュウ・ヤマト！行きます！！」シュンッ

上条「あいつは一体何がしたかったんだ？」ハテ？

土御門「やっぱりガン〇ム大好きなんだにゃー」

食蜂「それでは私たちも帰りましょう」

一方通行「あァ…そうだな」

8月30日（後書き）

ガン〇ムのセリフを入れたいがために大和を犠牲にしました。

こういった食事のシーンはほのぼのとしていいと思いませんか？

8月31日（前書き）

さぁ！今日は突入です！

8月31日

――――――○○学区路上

学園都市最強と学園都市最凶の男は2人揃って仲良く歩いていた

上条「つまり、そこの研究施設に打ち止め（ラストオーダー）と呼ばれる妹達がいるんだな？」

一方通行「あァ…ハッキングで手に入れた情報が正しければな」

上条「でも、なんで1体だけ生み出すことにしたんだ？」

一方通行「わからねェ…ただクソッタレどものレポートによると、「いつか使う時が来る」…って書いてあったけどなァ」

上条「いつか…ね…」

一方通行は上条にハッキングで手に入れた情報全てを話していた
道を曲がり再び進もうとしたその時…

大和「おいおい…俺を置いて行く気か？」

家に居るはずの周大和がそこにはいた

上条「な…なんで大和がここに！？」

大和「簡単に言うとストーキングかな？」ニヤニヤ

一方通行「チッ…なら今、俺たちが何をしょォとしているのかも分かってんだろ？」

大和「モチのロンだぜ」

上条「お前も来る気か？」

大和「あんなこと聞いて黙って帰れっかよ！」

一方通行「ほかの3人はいねェンだろうな？」

大和「あぁ…あいつらは呼んでない」

上条「土御門はともかく、女の子をこんな殺伐とした場所に連れて来たくないからな」

一方通行「居なくて正解だぜェ」

そして一方通行は研究所が防衛として雇った暗部のグループ「アイテム」のことを2人に話した。

上条「つまり、その長髪の女には気をつけろと？」

一方通行「あァ…こいつは第4位だ、まァ俺たちが負けるわけないけどなァ」ニヤニヤ

大和「だな」ククク

上条「さぁて行きますか！」

3人は全速力で研究所へ向かった。

上条「ここか…」

一方通行「あァ……こ…こ…だ……」ゴホッゴホッ

大和「体力なさすぎだろ」ケラケラ

上条「じゃ最優先は打ち止め(ラストオーダー)で！アイテムの奴らは殺すなよ？俺たちは一般人だからな？」

大和「わかってるって！」

一方通行「死ぬなよ…」

上条「互いにな」

――――――研究所ー物資搬入口

大和「誰も居ないのか…？」

そう呟く大和の左側から人形が飛んできた

大和「なんだッ！？」

咄嗟によける大和。その直後人形が爆発した

？？「あんたが侵入者であってる訳？」

爆弾が飛んできた方向に金髪の高校生ぐらいの女の子が立っていた。

大和「おいおい…人形は遊ぶためのものだぜ？爆発させちゃ可哀想だろうがフレンダさんよぉ」ニヤニヤ

フレンダ「結局五月蝿い訳よ…とっとと死んでくれたら楽なんだけど！」

彼女が言葉を発し終えると大量の人形(爆弾)が飛んできた

大和「!?」

――――――研究所ー培養基安置部屋

一方通行はいち早く培養基を見つけた
そこには超電磁砲を４歳前後若くした容姿の女の子が入っていた

一方通行「こいつが…打ち止めってやつなのか…？」

？？「そのガキが誰だか知らねーけどさ、私たちはそれの護衛なんだよね」

一方通行「てめェは…第４位、麦野沈利だな」

麦野「あぁ！？…てめぇは第１位か…」

一方通行「あァ…悪ィがそこをどいてくンねェか？」

麦野「はぁ！？そのガキを連れ出すってのかよ」ケラケラ

一方通行「あァ…その通りだ」

麦野「連れ出してどうするってんだよ！！」

一方通行「そンときはそン時だ…今はコイツを助けるのが優先なんでなァ、てめェに構ってる暇はねェンだよ！」

麦野「第1位だからって一人でこの街の【闇】をどうにかできると思うなよ！？」

一方通行「ふン…俺たちはなァ…一人じゃねェンだよ」

麦野「うっせーーーーんだよ！ここで消えてなくなりやがれ！第1位！！！！！」

彼女は右腕を一方通行の方向に伸ばした。
刹那
右腕から光の光線が飛び出し一方通行に向かって飛んでいった

一方通行「チッ！」

――――研究所内部ーメインコンピューター室

上条「ここは…コンピュータールームか…？」

？？「あなたが侵入者ってことで超間違いはありませんね？」

上条「えーっと…絹旗…最愛（モアイ）だっけ？」

絹旗「最愛(モアイ)じゃありません！最愛(さいあい)です！」

上条「んでアイテムの絹旗サンは俺たちの邪魔をしようと？」

絹旗「えぇ…超その通りですよ！」

彼女は能力を使って上条に殴りかかった

上条「あっぶねぇ！」ヒヤヒヤ

よけると同時に右腕で彼女の肩に触れた

絹旗「反射神経は超良いそうですね」

上条「まぁな、昔鍛えたから」

絹旗「ですが！これで終わりです！！」ブンッ

絹旗は窒素装甲(オフェンスアーマー)を展開し上条に再び殴りかかった…

上条「…」ニヤッ

絹旗「な…ぜ…なんで無傷なんですか！？」

上条は絹旗に鳩尾を殴られていた。だが傷一つ負わず、後方にも飛んでいなかった

上条「簡単なことだ…お前の窒素装甲を借りたまでさ」

絹旗「はァ！？私を馬鹿にしてるンですか！？」

上条「馬鹿にはしてないさ…ただし、お前が俺に勝つことは１００％ないってことだけは断言できるね」

絹旗「こンなとこで負ける訳にはいかねェンですよ！闇の人間は失敗したらそこで殺されちまうンです！私はこンなとこで死にたく無いンですよ！」

上条「でも顔にはもう「戦いたくない」って書いてあるぜ？」

絹旗「！？」

上条「今ならお前を暗部から引っ張りだすことができる。しかもその後の命の保証もある」

絹旗「そんな…こと…超無理に決まってます…」

上条「いいや俺にはできる。表に戻りたいんなら俺の手に触れろ、戻りたくないんなら今すぐここから立ち去れ」

絹旗は少しの間考え、上条の手に触れた

その瞬間目の前の風景が代わり、目の前には逆さづりになった人物が映った

――――――窓の無いビル

アレイ☆「来ると思っていたよ…上条当麻」

上条「ようアレイスター…久しぶりだな」

絹旗「あ…アレイスター！？あ、あの統括理事長の！？」

アレイ☆「ふふふ…その通りだ、私こそ学園都市統括理事長アレイスタークロウリーだ」

上条「んで、そのアレイスターにお願いがあってきたけど…どうせ知ってるんだろ？」

アレイ☆「勿論だよ…君たちの戦闘は全て見ていた」

上条「なら話早いな…アイテム全員を表に返してやってくれ」

アレイ☆「ふむ…別に構わない」

上条「それと命の保証もな」

アレイ☆「わかった……おい！」

側近「上条様…こちらです」

アレイの側近は４枚の用紙を上条に渡した
その内容を見た上条は口元を緩ませ３枚の用紙を空間移動させた

上条「あ…それと絹旗を俺の妹として戸籍追加よろしく」

そう言い残した上条は絹旗を連れて研究所へ空間移動していった

――――――研究所

大和「ふ…ふふふ…あっはっはっはっはっは！！！！上条の野郎おもしれぇことしやがるじゃねーか！！！ほら見てみろよ！！フレンダさんよぉ」

大和は手にもっていた上条をフレンダに渡す

フレンダ「！？……これは一体…何がおこってる訳よ？」

一方通行「ククク…当麻もおもしれェことするじゃねェか」

一方通行は足のベクトルを操作して麦野の目の前に移動した
あまりの速さに麦野は追いつけずいきなり目の前に現れた一方通行に驚いていた

一方通行「第４位…これを見てみろ」

麦野「はぁ！？んだよこれは！！一体何がおこってんだよ！！！」

一方通行「俺の仲間がアレイスターに交渉したンだろォよ」

麦野「私たちが表に戻る…？」

一方通行「ふン…あとは自分たちでどうにかするんだな」

Ｐｉｒｒｒｒ

一方通行「当麻か…何なに…？クハッおもしれェことしやがンな！」
ケラケラ

一方通行「おィ第４位！絹旗とかいうガキはうちの仲間が保護した
そうだ。あいつは別の場所に移動してるよォだからもうここにはい
ねェってよ」

一方通行「……10分だ…10分後にここの研究所は俺が破壊する…それまでに逃げておけよ」

そう言って一方通行は培養基から打ち止めを出して、そこらへんに落ちていた布切れを被せると研究所の外へ出ていった

――――――カエル病院

大和「当麻はどうした？あいつも入院か？」

一方通行「元アイテムのガキに今の現状と、俺たちの周辺のことを教えているらしい」

大和「そっか…それにしてもさっきのプラズマ…だっけか？すごかったな」

一方通行「計算がちょっぴりダルかったけどなァ…」

そこに冥土返しと上条兄妹が入ってきた

冥土「打ち止めは少しの間ここで調整だね…そのあとは一方通行、君が面倒見るんだよ？」

一方通行「はァ！？俺かよ！！」

大和「いいんじゃねーか？頑張れよ一方通行！」

冥土「決まりだね？僕は調整があるからもどるからね」

そう言い残して冥土返しは部屋から出ていった。

絹旗「いきなり暗部から抜け出しても、実感が超わかないです」

上条「ま、徐々に慣れていけばいいさ」

大和「そうそう、ゆっくり慣れていけよな…それと俺のことは大和って呼んでくれ」

一方通行「俺は一方通行で構わねェ」

上条「俺のことは好きに呼んでくれ」

絹旗「は…はい、よろしくお願いしますね…大和さん、一方通行、お兄ちゃん」

上条「お兄ちゃん！？そっそれは…」アセアセ

大和「頑張れよ！お兄ちゃん！」ケラケラ

一方通行「お兄ちゃン」ケラケラ

上条「てめぇら…くそったれが…」ｏｒｚ

大和「もうそろそろ帰ろうぜ…明日は始業式だ！」

上条「そうだな…帰るか！」

彼らは自分たちの寮へ帰っていった

上条「たっでーまー」

絹旗「お…お邪魔します」

上条「お！さっすがアレイスター行動がはやいぜ！」

上条の目の前にはベッドが二つ置いてあり、片方にはキャリーケースと「柵川中学」の転校許可書が置いてあった。

絹旗「こ、これは…一体…？」

上条「俺が頼んでおいた品だな…お前も学生だろ？なら学校に通わなきゃな」

絹旗「制服まで入ってる…ここまでしてもらって大丈夫なんですか？」

上条「まぁ…お前の兄になったわけだし、遠慮すんなって！」

絹旗「超ありがとうございます」

上条「ちなみに初登校は明日だから。先に風呂に入って早く寝たまえ」

絹旗「は…はい！」

そうして絹旗最愛は新しい人生を歩み始めるのであった。
そして、色々な行事がある2学期が始まる！！！

――――窓の無いビル

??「どうゆうことだ！アレイスター！アイテムを解体するなどッ！」

アレイ☆「今日はお客さんが多いな…君は何が目的だい？」

??「いくら幻想殺しの頼みだからといって簡単に暗部グループを解散させるなど！」

アレイ☆「構わないさ…あれがなくても私のプランに支障はない」

??「俺はお前の考えていることなど分からない…」

アレイ☆「普通の人間には理解などできるはずもない」

??「お前は一体何が目的なんだ！？」

アレイ☆「……連れて行け」

アレイスターが言葉を言い終えるのと同時に案内人が現れ、訪問者を連れていった

アレイ☆「私も上条当麻の生き様を見届けたくてね」ククク

誰も居ないビルの中に不吉な笑い声が響いていた。

8月31日（後書き）

アレイスターを「アレイ☆」にしたほうが、シリアスムードからすぐに脱出できると思ってアレイさんを☆にしました

絹旗を妹にした理由は、
?:まだ中1で、ずっと暗部にいたらしいから一般人として生きにくいのではないかと上条が考えたから。
?:ただ単に作者が一番好きなキャラクターだから

二つ目は理由になっていませんね…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1346ba/

とある仲良しの日常

2012年1月5日18時47分発行